

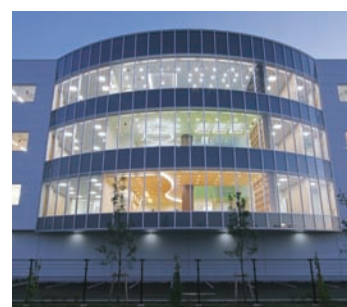
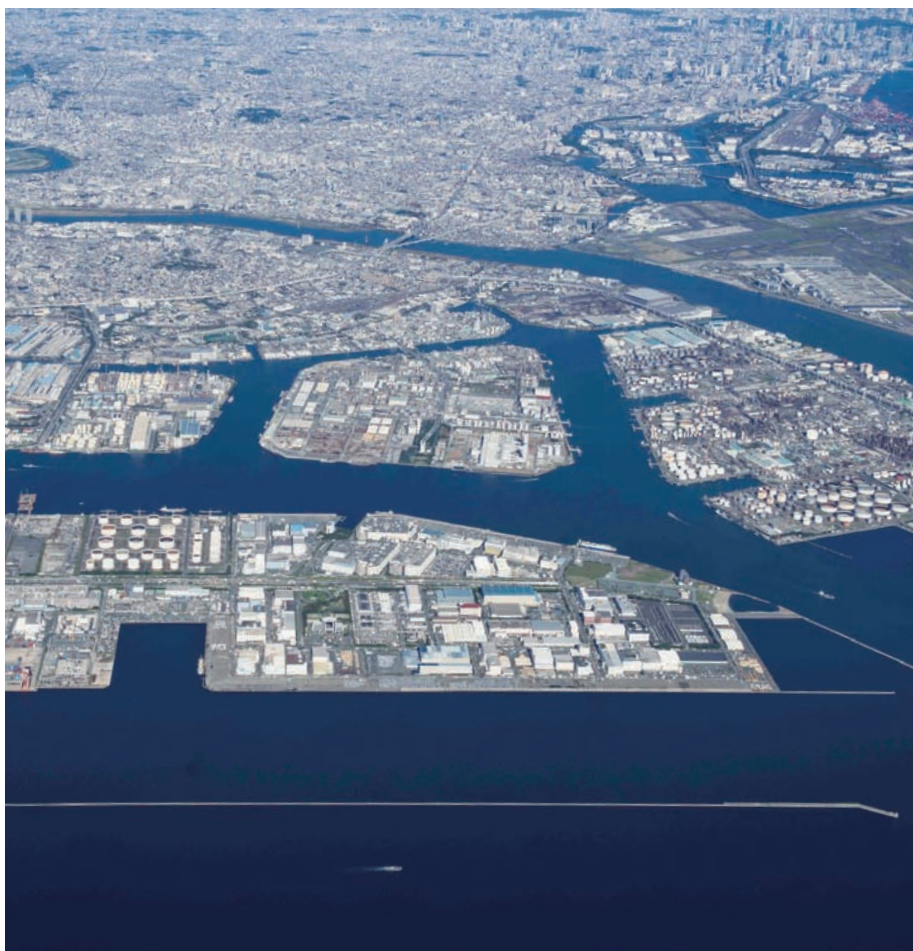
Kawasaki INnovation Gateway

Newsletter Vol.16 2017年8月発行

 川崎市
KAWASAKI CITY

臨海部国際戦略本部
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町1
TEL:044-200-3634 FAX:044-200-3540
<http://www.king-skyfront.jp/>

30年後の川崎臨海部を考える ～臨海部ビジョンの策定に向けて～



川崎市は、2016年より二年間かけ「臨海部ビジョン」を策定しています。これは川崎臨海部にかかわるすべての方々が共有できる「30年後を見据えた目指すべき将来像」と「その実現に向けた戦略や取組の方向性」を示すものであり、その中間取りまとめの内容について、参加者と共に考える「30年後の川崎臨海部を考える～臨海部ビジョン策定に向けたシンポジウム～」(主催 川崎市・共催 NPO法人 産業・環境創造リエゾンセンター・後援 川崎商工会議所)が、6月21日(水)、川崎市産業振興会館にて開催され、約270人の関係者をはじめ、市民の方々が参加されました。

冒頭、福田紀彦川崎市長は「『臨海部ビジョン』の策定は歴史的な事業。行政だけでなく、より多くの英知を結集して共有したい」と挨拶。その後、臨海部ビジョン有識者懇談会座長の涌井史郎氏(東京都市大学環

境学部 特別教授)より、臨海部が目指す姿は「成熟社会における豊かさを実現する産業が躍動し、最先端の研究が行われ、新たな技術が生まれ続ける未来が溢れる地域として、働く



(涌井史郎氏 東京都市大学 環境学部 特別教授)

人や市民の誇りとなっている」「多様な人材が集い交わり、『働く・暮らす・学ぶ』が充足した魅力的な地域環境が調和している」と報告。続くパネルディスカッションでは、「30年後を見据えた川崎臨海部の目指すべき将来像とは」をテーマに意見が述べられました。

パネリストの意見と分析

■「キング スカイフロントの技と知恵の融合が象徴するように、川崎は日本で最も高い付加価値を生み出すまちになるだろう。公害都市から脱却し多摩川を再生したポテンシャルがあり、水素エネルギーに関しては東京より早く動き出すと思う」

(橘川武郎氏 東京理科大学大学院イノベーション研究科 教授)

■「以前の臨海部では大きな装置が主役だったが、これからは人と知恵がそれに代わる。市街地とグラデーショナル的に繋がり、多様な人が集い楽しく過ごせる環境が必要」

(中井検裕氏 東京工業大学環境・社会理工学院建築学系 教授)

■「世界の臨海部の多くとは異なり、川崎では重化学工業の発展と同時にライフサイエンス等の新しい産業が芽生えている。その相互誘発を期待すると同時に、市民が誇れる臨海部になってほしい」

(平尾光司氏 昭和女子大学名誉理事)



■「重化学工業で働くことには、とかくマイナスイメージがつきまってきたが、今は多くの女性従業員が働く環境。30年後はますます(女性や高齢者に働いていただける)労働環境が整ってくる」

(藤井文人氏 JXTGエネルギー株式会社 常務執行役員 川崎製油所長)

■「臨海部と市街部の市民との間に研究開発機能が介在して、新たなイノベーションを創出していく川崎。誰もが住みたい、働きたいまちになってほしい」

(服部恵子氏 慶應義塾大学リサーチコンプレックス推進プログラム オーガナイザー)



シンポジウムに参加した市民の声

甲 初美さん(川崎市中原区 主婦)

川崎で生まれ育ち、公害問題に対応したことは知っていますし、グリーンな環境になった実感もありますが、これまで臨海部を訪れるチャンスはありませんでした。30年後の臨海部には、一般市民も最先端医療を享受できる、希望を与える場所であってほしいです。今は自然が豊かな川崎と最先端科学をリードする川崎、その両方に子供と頻りに訪れることができたらいいと思います。



守屋法久さん(川崎市多摩区 会社員)

九州出身のため、「都心の工場地帯」というイメージだった川崎でしたが、実際に住むと自然も多く残っています。シンポジウムでは、水素エネルギーなど環境への先進的な取り組みが印象的でした。将来は、「川崎=最先端科学を生み出すクリーンなまち」と、誰もがすぐにイメージするまちになってほしいと願っています。



慶應義塾大学が、国立研究開発法人科学技術振興機構の「リサーチコンプレックス推進プログラム」の中核機関として、キング スカイフロントにある「殿町タウンキャンパス」を拠点に、2015年から5年計画で進めている地域イノベーションプログラム、「世界に誇る社会システムと技術の革新で新産業を創るWellbeing Research Campus」についてお話をうかがいました。



服部 恵子

慶應義塾大学 ウェルビーイング研究センター
リサーチコンプレックス推進プログラム オーガナイザー

超高齢社会を生きる人々の

ウェルビーイング Wellbeingを高める

イノベーションを次々と!

Q キーワードは、 「Wellbeing(ウェルビーイング)」ですね。

A 「誰もが健康的で、安心して、生き生きと誇りを持って暮らすことのできる社会をつくる」というのが、Wellbeingであり、私たちの目的です。世界に類を見ない超高齢社会に突入し、さまざまな課題に直面している日本で、「世界中の人々のウェルビーイングを持続的に高めるための知見やサービスを生み出す、継続的なイノベーションを図っていきたい」と考えています。

Q イノベーションを生み出すために 必要なことは?

A 一つの考え方にとらわれることなく、さまざまな考え方がぶつかり合うことによってこそ、革新的なものが生まれます。例えば、エンジンを研究する際にも、材料、デザイン、排ガスの抑制など、研究分野は多岐にわたります。それらを融合して、初めてイノベーションが生まれるのです。「オープンイノベーション」といいますが、そうした仕組みを、川崎市の殿町を拠点に、地域が持っている力を有効活用して創ろうと、現在慶應義塾大学を中核機関としてチャレンジしているところです。

Q 具体的な活動内容は?

A 異分野の研究者同士や、企業・機関とコラボレートして取り組む「融合研究」を支援しています。単に、研究で終わらせるのではなく、新しいビジネスの創生を促し、社会実装を目指します。新しいサービスや製品を生む「事業化支援」や若手研究者などの「人材育成」、それらを支えるデータベースなどの「基盤整備」を行い、融合研究から社会実装までの仕組みづくりを行っています。

Q 「融合研究」の具体例は?

A 「分子設計・ナノファブリケーション」「再生・細胞医療、実験動物」「AIと連携するヘルスケアOS」「ロボット・医療機器」という4つの中核技術領域を設定し、日本のトップクラス、世界的にも大変著名な研究者が名を連ねて取り組んでいます。例えば、「脊髄損傷の改善」というテーマでは、再生・細胞医療とロボット・医療機器の2方向から研究を進めており、新しい治療方法が開発され、患者の症状が回復・軽減すれば、医療費の削減など大いなる社会貢献につながるでしょう。

Q 川崎市殿町地区を 活動拠点に選んだ理由は?

A 通常、広大な工場跡地は、切り売りして倉庫街などにしてしまうケースが多いものですが、川崎市はライフサイエンスの拠点として計画し、その核になる研究機関・企業を誘致していました。国立医薬品食品衛生研究所なども移転予定です。また、羽田空港が近く、連絡道路ができるとますます近くなります。現在、ホテルなども建設中で、人が集まりやすく、オープンイノベーションの拠点として最適なエリアなんです。殿町地区は、世界に一番近い研究拠点だと思っています。

Q 川崎市民へのメッセージは?

A 研究者と交流する「Tonomachi Cafe」を定期開催しており、地元企業の皆さんも最新技術の話聞きに、積極的に参加されています。また、医療機関のプラットホームをつくり、患者データの共有などを目指した研究では、将来、その成果を市民の皆さんに還元したいと思っています。羽田空港の対岸にこんな面白いエリアがあることをぜひ知っていただきたいです。これまで重化学工業色が強かった京浜工業地帯に、ライフサイエンス系の新分野が進出したことがいい刺激となり、地域全体の活性化につながればうれしいです。

Topics 1

世界初！使用済みプラスチック由来の低炭素水素を利用するホテル



本紙Vol.14(2017年1月発行)で既報した通り、国際戦略拠点としての整備が着々と進んでいるキングスカイフロントのA地区に、2018年春、東急REIホテルが開業します。同地区では、川崎市と大和ハウス工業(株)との連携・協力によりライフサイエンスの研究機関の誘致を進めており、そこで働く研究者や地域の方々の生活利便をサポートし、国内外からの来訪者にとっての滞在場所としても機能するものとして期待されています。



また同ホテルは、昭和電工株式会社川崎事業所で作り出される「使用済みプラスチック由来の低炭素水素」をパイプラインにより直接供給され、大型燃料電池によってエネルギー利用します*。その結果、施設全体で使用する電気や熱エネルギーの約30%相当を水素エネルギーで賄うことが可能となる予定です。

*本紙 Vol.11(2015年12月発行) 参照

Topics 2

南武線 武蔵溝ノ口駅が「エコステ」モデル駅に！

水素エネルギーの利活用を推進しているJR東日本は、省エネルギー・再生可能エネルギーなどさまざまな環境保全技術(エコメニュー)を駅に導入する取組、「エコステ」を実施しています。その一環として、2015年1月に川崎市と締結した包括連携協定に基づき、武蔵溝ノ口駅がCO₂フリー水素エネルギー**を活用した「エコステ」モデル駅として、4月17日にリニューアルしました。詳細は次のとおりです。 **水素製造時にCO₂を排出しないクリーンエネルギーのこと。

(1)「創エネ」：自立型水素エネルギー供給システムの導入、太陽光パネルの設置

自立型水素エネルギー供給システムは水と太陽光のみで稼働できるため、災害時には貯蔵タンクに蓄えた水素を利用して燃料電池で発電し、一時滞在所に必要な設備への電源供給が可能となりました。

(2)「省エネ」：照明のLED化、 高効率空調機器の導入

駅ホームおよびコンコースの照明設備のLED化や、事務室等への高効率空調設備の導入により、消費エネルギーの削減を推進していきます。

(3)「エコ実感」：デジタルサイネージの設置、エコ待合スペースの設置

デジタルサイネージをコンコースに設置。駅利用客等にエコステの取組を紹介し啓発します。また、エコ待合スペースには、夏期はミスト、冬期は自立型水素エネルギー供給システムが排出する温水を活用したウォームベンチを設置します。

(4)「環境調和」：駅舎壁面への 自然素材の活用と緑化

コンコースや自由通路の壁面での、自然素材の使用や緑化を施し、自然と調和する空間を創出しました。

